

サービスラーニングを振り返って

社会福祉学部社会福祉学科2年 小野 真希
活動先：知多地域障害者支援センター らいふ
クラス：松下 典子 先生

●活動先紹介

私が活動させて頂いた団体は、東浦町にある、知多地域障害者支援センターらいふである。らいふは、社会福祉法人愛光園の事業の一つであり、直接支援であるホームヘルプサービス、レスパイトサービス、日中一時支援事業等を行っている。支援対象地域は、大府市、知多市、東海市、阿久比町の3市2町で、地域に密着した支援活動をしている。

日中一時支援事業とは、障害のある方の放課後や休日の居場所及び活動の場の提供と障害のある方を、日常的に世話している家族の就労支援や一時的な休息が目的の活動である。

らいふ独自の活動として、レスパイトサービスといった、家族を介護から一時的に開放して家族の代わりに介護するという支援も行っている。しかし、このサービスは制度には存在しないものなので、費用が自己負担と課題も残る。

●らいふの活動目的

地域の中で暮らしている障害のある方や家族が、安心して生活し続けられるように応援することを目的としている。

●らいふの活動理念

「どんなに重い障害を持っていても、だれととりかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。」(糸賀一雄/福祉の思想) この理念の実践を愛光園は続けてきた。施設をつくるのではなく、当たり前前に普通の暮らしができるようにと、地域支援活動を開始した。地域の中で快適に暮らし続けるには、いつでも必要な時に必要なだけ利用でき、また安心できるサービスが必要である。このサービスを充実させ必要に応じて選ぶことができるサービスを提供し、できるだけ自立した生活を支援することが、らいふの役割であり目的である。

●私の活動目標

今まで障害をもった子どもと関わったことがないので、障害をもった子どもと関わることで“障害とは具体的に何か”をしり、地域で支援を続ける施設の現状や問題、大変なことを学び、将来いかせるようにする。

●活動

私は、日中一時支援事業の活動をさせて頂いた。らいふでの1日の流れは、利用者がらいふに到着→自立課題→遊び→お昼ご飯→遊び→お買い物→おやつ→遊び→利用者が帰宅という流れで、私は常に担当の子どもに付き添い一緒に自立課題のお手伝いをしたり、遊んだりした。

この自立課題とは、利用者1人1人にあったプログラムが用意されていて、パズルや見本通りに物をしまうなどがある。利用者が課題をどうしたらよいか分からなくなって、や

るのをあきらめてしまった時や、間違っ了解き方をしているときに、一緒に手を取りあって課題に取り組んだり、声かけをして最後まで取り組めるように支援をした。遊びでは、利用者が遊んでいるのを見守っていることが多く、利用者が安心して楽しめるように支援活動を行った。

●企画

最終日に私が考えた企画をさせていただいた。利用者みんなで楽しめ、簡単にできるようにと、カップケーキ作りを企画した。カップケーキは、市販の粉に卵を混ぜて3分レンジにかければできるもので簡単なものである。

このカップケーキ作りでは、利用者さんに卵をわってもらったり、粉をまぜてもらったり、カップをおいてもらったりして全員が参加して協力してつくることができた。利用者さんがひとりで粉を混ぜるのが難しい時は、私がボールをおさえたりして、共同で作業をした。みんなで声かけあい、楽しく、美味しいカップケーキをつくることができて、企画は成功した。しかし、カップケーキに使う道具の準備不足や、利用者さんに対する声かけが職員さんばかりになってしまうなど反省点も多く残った。

●自分の成長と気づき

活動を通してまず障害という偏見がなくなった。今まで障害をもった子と関わったことがなかった為、障害があると何もできないというイメージをもってしまっていて、差別をしていた。しかし子どもたちは、時間にあわせてスケジュール通りに動くことができたとし、できることも自分で全てして、自立していた。障害があっても私達とは何も変わらないと感じた。物事を障害があるからと決めつけるのは良くないと、気づくことができた。

活動をはじめたばかりは、利用者が叫んだり急に走り出してしまうことに戸惑いを感じ、一緒に活動をするのが辛かったり、不安も多くあった。しかし活動していく内にそれが、障害があるからと思うのではなくその子の性格、個性だと思えるようになった。その子は明るい性格だから叫ぶこともあるんだと思えるようになり、笑顔の利用者をみていると私も、辛いとか大変という思いがなくなり活動が楽しくなった。障害をもっている健常者と変わりが無いとおもえるようになったのは活動を通して私自身成長したことである。

●活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

らいふではスケジュールが決まっても特に厳しいことはなく、職員と利用者の距離が近くとてもアットホームな場所であるため、利用者は安心して楽しく過ごすことができていた。らいふのような居場所があることは、親にとっても子どもにとっても地域の人にとっても心強いのではないかと感じた。いつでも安心できる場所があるのは私達にとって重要なことである。だからこそ、らいふのような地域支援活動を行う支援施設がもっと増え地域からの支援が充実されるといいと思う。

●最後に

らいふでは、まだまだ待機している人がいたり、職員の数が足りないという現状がある。そして、地域に、らいふのような施設があることを知らない人が多い。私も、らいふで活動させてもらうまでは、らいふのような支援施設があることを知らなかった。

これらの現状を改善していくためには、私達をもっと支援施設の重要性や現状を多くの人に伝えて施設を知ってもらうことからはじまると思う。活動をして必要性を感じたからこそ、多くの人に伝え若い私達が力になっていきたいと思う。